

明治維新は、列強の東アジア進出による国際環境の変化に対応し、「海防」(安全保障)と国民の「安寧」を指して行われた、近代日本の最も大きな変革である(詳しくは、伊藤之雄『維新の政治と明治天皇』参照)。それに比べてあまり知られていないが、第一次世界大戦後にも、日本は世界秩序の変化に対応し、ある意味では明治維新に準じる大変革を迫られた。本書の主人公である原敬と大隈重信は、この二つの時期に異なる立場で変革に取り組んだり対応した。明治維新の時期において朝敵藩となった南部藩(盛岡藩)に生まれた原は、運命に翻弄された。他方、大隈は有力藩の一つの肥前藩(佐賀藩)に生まれながらも、長州藩を背景とした木戸孝允に見出され、木戸派の有力官僚として維新の変革に参加した。大隈は日清戦争後に、原は日露戦争後には、対立する二大政党をそれぞれ代表する大物政治家となっていた。大隈は第一次世界大戦中、原は大戦終了直前から戦後に、それぞれ首相として、新状況に対応すべく、外交・内政の大変革を試みた。

本書は、明治維新から第一次世界大戦後にかけて、それぞれの立場で状況を切り開いていった原と大隈の生涯を比較して、両者の違いや共通点、それらを背景とする政治対立と相互の認識を考察する。また運命に翻弄されたり流されたりしながら、対立する存在となっていく二人の人間関係を改めて見つめたい。そのことで、原と大隈という二人の大政治家の実像がこれまで以上に見えてくるであろう。

現在の日本は、少子高齢化や経済の停滞に直面する中で、気候の大変動、安全保障環境や産業の大き

な変化など、世界の大変革期に直面している。二つの大変革期を体験した二人は、本書で述べるように、現代でいう社会の多様性と公共性の実現を目指して、どのようなバランスを取るのかに苦慮しながら、それぞれの立場で、当時の保守派や現実から遊離しがちな急進主義者と対決し、少しずつ社会を前進させてきたといえよう。この二人を改めて考えることは、日本の行く末やリーダーのあり方を考える一つの素材となるように思える。

まず第1章で、原がこれまでどのようなようにとらえられてきたのかについて大きな流れを見て、次いで第2章では、大隈についても同様に検討してみよう。

なお、原も大隈も理念を持った政治家で、現状に対応しながらも内政・外交政策を一貫して形成していった。そのことにとくに疑問を抱かない方は、第1章・第2章を飛ばして、第3章から読み進めてくださっても、本書は十分に理解できる。